

藤沢周平

なが
が
と
の
か
み

長門守の陰謀





文春文庫

192—5

長門守の陰謀

定価はカバーに
表示してあります

1983年9月25日 第1刷

著 者 藤沢 周 平

発行者 西 永 達 夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-719205-5

又春文庫

なが と のかみ
長門守の陰謀

藤沢周平



目次

夢ぞ見し

5

春の雪

45

夕べの光

93

遠い少女

137

長門守の陰謀

177

「あとがき」にかえて

212

解説 関口苑生

215

夢ぞ見し

一

日暮れになり、そろそろあたりがうす暗くなると、昌江は気持がいら立ってくる。

——また、今夜もおそくなるらしい。

それならそうと、朝出かけるときにひとことこわっていけばいいのだ、と思う。夫の甚兵衛^{じんべえ}のことである。

こういうことが、このところずっと続いている。二日に一度くる通いの婆さん女中がいるだけで、子供もいない夫婦二人だけの家だから、亭主の下城がおそいからといって、子供にかこつけて飯にしようわけにもいかない。仕方なく待っていると、五ツ（午後八時）ごろになってぼんやりした顔で帰ってきて、「飯はいらん」と、ぼそりと言う。

さんざん待たされたあとでは、その煮えたか煮えないかわからないような、発音不明瞭な声を

聞いただけで、昌江は頭にカッと血がのぼる。

「今日は遅うございますか。それとも普通でございますか」

たまりかねてそう聞くことがあるが、そう聞かれると、甚兵衛はまるで天下の大事にかかわる相談を持ちかけられたとでもいうふうに、「さて」と言ったきり、腕を組み、深刻な表情で土間にモジモジと立っている。

じっさい、助け舟を出さなければ、いつまでも立っているのだ。その決断の鈍さには、あきれるほかはない。自分を嫁にもらうときに、よくふんぎりがついたものだと怪しむほどである。

「ようございます。普通にお帰りなさるつもりで支度しておきますから」

しびれが切れて、昌江がそう言うと、甚兵衛は救われたように家を出て行く。勤めだけは休みもせずまめな男である。だが、少しまめ過ぎはしないかと、昌江は思うのだ。

御槍組おやりに勤めて、二十五石である。御槍組勤めなどというと、一応の聞こえはいいが、仕事は武器倉の番人のようなことで、時どき手下の足輕に槍や鉄砲を手入れさせ、自分も一緒になって槍を磨いたりしているらしい。

——ご自分の御槍はすっかりさびついているくせに。

昌江はついはいしたくないことを考えてしまう。それというのも甚兵衛は、帰宅が遅くなったことまた二月ばかり、昌江の身体に触りもしていないのだ。遅く帰り、帰るとなぜかぐったり疲れていて、

寢室に入っても、ころがったかと思うともういびきをかいている。

それも頭にくる。喰いものは冷たくなってもあたたため直すというてがあるが、いびきをかいている亭主ばかりはどうしようもない。

——それにしても、なんでこんなに帰りがおそいのだろ。

と昌江は訝しくてならない。

隣の宮部家の主人は、普請組勤めで禄高は七十五石。三倍もの俸禄を頂いているが、下城の時刻になると、間もなくして測ったようにきちんと帰ってくる。歩きながら空咳をするのが癖で、家の前をえへん、えへんと聞き馴れた咳ばらいが通るからすぐにわかる。

そしてじきに白地の浴衣に着がえて庭に降りると、涼しげに植木に水をやっている。ゆとりがある。夫のように、眼をくぼませて帰ってきて、溜息をついたりはしていない。

時には、水をやっている宮部のそばに、昌江より二つ三つ年若らしい静尾という名の妻女がつきそって、濡れないように袖をつまんでやったりしている。琴瑟相和している様子がうかがわれて、昌江はうらやましくなる。

隣の風流をまねて植木に水をやれというつもりはない。だが、たまには早く帰ってきて、尻はしよりして庭の草でも抜いたらどうかと思うのだ。

——そんなに働いて、まあ……。

それでたったの二十五石と思うと、昌江は時どきばからしくなる。なぜそんなに毎晩遅いのか、と昌江は一度だけ聞いたことがある。だが甚兵衛は、「いそがしい」とのっそり答えただけだった。

それでは答になっていないから、なぜいそがしいのか、ともう一步つめ寄りたかったが、やめにした。夫の口から満足のいく答を引き出すまでに、またいらいらと肝を煎らなければならぬことは、眼に見えていたからである。

——この家に嫁入ったのは間違いだったか。

昌江は時どきそう思う。そう思うようになったのは、どうやら子供がさずかることはないらしいとあきらめた三年前ごろからである。昌江は十八で嫁入り、いまは二十八である。二十半ばまでは、まだ子が生まれるかも知れないという楽しみがあった。

だが半ばをすぎると、静かにあきらめがきた。同時に連れ合いのアラも見えてきたのである。

もともと気乗りした縁談ではなかった。二十五石という小禄が氣にいらなかったわけではない。大体が四万石にちょっと毛がはえた程度の小藩のことで、昌江の家でも六十石しか頂いていない。貧乏世帯のやりくりには自信があった。

問題は人物である。嫁入る前に、昌江は一度だけ甚兵衛を見ている。

「あれが小寺甚兵衛だ」

と兄が言った。

町で、年に一度の盆踊りがあった夜である。盆踊りは、近在からも人が集まり、何段にもわかれた踊り子が昼すぎから唄、鳴物のはやしにつれて踊りはじめ、夜を徹して町の隅から隅まで踊りまくる。そして次の日の明け方に終る。

昌江は兄に連れられて踊りを見に行った。そして大通りを埋めた人混みの中で、そっと甚兵衛をのぞき見たのである。

感心しなかった。かけならべた燈火の明かりの中で、甚兵衛は口をあけて踊りを見ていた。昌江たちには気づいていなかった。あんぐり口をあけているのは、ま、踊りを見とれてわれを忘れているとして許せる。

そこは眼をつぶるとしても、全体に印象がぱっとしなかった。背が低く、肩幅だけあった。蟹のような印象である。昌江は丈があつて、姿がよいと人にほめられるほどだから、並べばひょっとしたら昌江の方が高いかも知れないとおもうほどだった。

眼は細く、鼻は鼻翼が少し張りすぎている。口は、さっきから開きっぱなしだからわからないが、そうしまりがあるとは思えなかった。まとめて言えば、ぼんやりした顔つきの、むくつききおのことといった感じの男だった。取柄は肩幅が張り、胸も厚く、丈夫そうだったところだろう。

正直、昌江は氣落ちしていた。縁談があるといえば、やはり女は胸がときめく。相手はどんな方かと思う。その想像の中で、思いきり大胆に白皙長身はくせきといった相手を思い描いたりする。嫁入ってみてそれほどでもなかったと思っても、鼻は思ったほど高くないが、口もとのしまりがいい、などと、想像と異なったところをすばやく補い、しばらくすると、あまり美男子でない方が、女子にもてはやされる心配がなくてよいなどと思うようになるのだ。

だが甚兵衛は、顔と言ひ姿と言ひ、ひっくりるめて想像を一段下回った形で、どこをとっても補いようもない感じだった。人がすすめてくれる以上、昌江はもうちょっとましな人物を思い描いていたのである。昌江自身は、自分でも多少容貌ようぼうに自信があつたし、人にも美しいと言われている。自分に釣合つりあうほどの相手を考えたとしても、昌江の罪ではない。

家へ帰って、昌江は正直にそう言った。ところが兄の新之助が、意外に強硬だったのである。

「男は顔や姿じゃないぞ」

小寺はああみえて、見どころのある男なのだと、新之助は力説した。見どころとやらが、あの丈夫そうな身体のほかにもあるような口ぶりだった。美男子の新之助が言うことだけに説得力があつて、昌江は間もなくその縁談を承知したのである。

だが十年連れ添って、夫のどこかに見どころがあつたとは思えなかった。風采ふうさいの映はえないのは承知できたから仕方ないが、ものを喋しゃべらないのには手こずる。暗闇の牛のようにのっそりしてい

る。男がぺらぺらと口達者くちだつしやなのは感心しない、と昌江も思うものの、甚兵衛の口の重さは行き過ぎてゐる。

しみじみとした夫婦の語らいなどということとはしたことがない。家の中の用を足すのが精一杯である。それでは昌江を嫌っているのかと思うと、そうでもないらしく、家にいるときは大てい昌江のそばにへばりついている。物も喋らないのが、のっそりとそばにいるだけなのは暑くらしい限りである。

微禄びろくの家だから、暮らしは貧しかろうとは思つたが、来てみてほんとうに何もないのにもあきれた。

甚兵衛の家は、両親が分家して建てた家で、その両親ともに、甚兵衛が子供のころ、相ついで世を去ったので、甚兵衛自身は、引きとられて元服げんぷくまで本家にいたのである。その間、家は人に貸してあつたという。

そのせいか、家財道具とおぼしきものがまるでない家だった。がらんとした家に、垢あかじみた着物を着た甚兵衛ひとりがいいたのには仰天ぎやうてんする思いだった。昌江はとりあえず、甚兵衛のために肌着から上に着る物ひとつとおりを買い、皿、小鉢こぼちから鍋なべの類までそろえた。そして夜具をととのえ、長持まで買うと持参金がなくなった。

こんなに何もないひとと珍しい、とそのとき思つたものだが、いまになってみると子種までな

かったわけである。子供が生まれないのは甚兵衛の方に原因があると、昌江はかたくなにそう思っている。

そう思うのには根拠がある。昌江の妹は、三年も遅れて嫁入ったのに、すでに三人の子持ちである。まだ一人や二人生みそうな勢いである。一番上の姉は四人の子がいる。次姉は身体が弱い弱いといいながら、それでも二人の子持ちである。身体も人いちばい丈夫な自分だけ子がないのは、夫のせいだと思えない。

あきらめてはいるものの、昌江は時どき姉妹がうらやましくなる。何が見どころかと、むかしの兄の無責任な言葉をうらんだりする。甚兵衛の見どころといえば、休みもせずに城に上がるのとだけである。それも毎日五ツ（午後八時）まで居残りして、二十五石の俸禄を守るのに汲々きゅうきゅうとしてゐる始末である。勤めを大事にするのは結構なことだが、夫の場合は結構を通りこしている。

帰って来ない夫のことをあれこれと考えているうちに、昌江はいつもこうしてだんだんに腹が立ってくるのだ。

そのとき土間の方に、物音がして、人が入ってきた様子だった。

——おや、今日は早かったこと。

昌江は顔をあげ、現金にいそいそと立ち上がった。夫が帰ってきたようだった。日が落ちたばかりで、いつもよりは一刻（二時間）も早い。

いくら口の重い亭主でも、食事をするときは一人より二人の方がいいのだ。床に入ればいびきをかくしか能のない夫でも、一人寝をするよりは、そばにいる方がいい。行燈をさげて昌江は上がり框に出た。

お帰り、と言おうとして、昌江は息を呑んだ。とび上がるほどびっくりしていた。土間に見たこともない男が立っている。

「やあ」

その男は、昌江をみると快活に声をかけた。長身にして白皙、涼しい眼をした若い武士だった。背負い袋を斜に肩に結び、手甲、草鞋がけ。手に編笠をさげている。旅をしていま着いたという姿だった。

やあ、と言われたが、昌江には見覚えのない人相だった。胸の動悸がまだおさまらない。「あの、どちらさまで？」

昌江は膝をついてようやく言った。